人気の三種が彫れる
仏像彫刻
上達のポイント
～大日如来座像・阿弥陀如来像・不動明王像～
関 侊雲　紺野 侊慶　監修
各像それぞれの工程と、より美しく彫れる「コツ」を
写真と図解でわかりやすくご紹介します。
メイツ出版の
コツがわかる本
STEP UP!

仏像彫刻

人気の三種が彫れる

上達のポイント

~大日如来座像・阿弥陀如来像・不動明王像~

関 侊雲　紺野 侊慶　監修

メイツ出版

人気の三種が彫れる

仏像彫刻 上達のポイント 目次

【本書中のアイコンについて】
・Check！…美しく仕上げるためのポイントです。
・ポイント…制作時に注意して見ておきたい部分です。
・仏師の一言…監修者からのワンポイントアドバイスです。

はじめに

私たちが「思い通りに彫れる　仏像彫刻　上達のポイント」を制作してから、早いもので３年半の年月が経ちました。この間仏像彫刻に親しむ方々の数はさらに増えて、その奥深い魅力に触れていただけるようになったことは大変嬉しい限りです。

仏像彫刻の技法は偉大な先人たちによって約 1000 年以上前に完成し、生み出された傑作の数々は日本人の信仰の対象として今も変わらない尊い存在感をたたえています。長い年月をかけて師から弟子へと受け継がれてきた技術を手がかりに、仏像彫刻の世界の楽しさをぜひ実感してみてください。

仏師　関　侊雲

（関侊雲　仏像彫刻・木彫刻学院、侊心会　仏像彫刻・木彫刻教室　各代表　日本木彫刻協会　会長）

仏師　紺野侊慶

（関侊雲　仏像彫刻・木彫刻学院、侊心会　仏像彫刻・木彫刻教室　各副代表　日本木彫刻協会　副会長）

第１章
大日如来を彫る

大日如来は、光背も華やかでとても人気のある仏像です。
細かい部分を組み合わせて完成させるので、
丁寧に彫って美しく仕上げましょう。

大日如来坐像
[制作工程]

・図面　P 8 ～ 12
・型紙　P13 ～ 16

大日如来は、光背の模様の動きをよく見て、立体感や曲線がきれいに出るように彫りましょう。台座・蓮弁など細かい部分が多いので、蓮の花びらの曲線や反りの具合をよく見て仕上げましょう。

	材料	線引き
1 本体・手	工程 1	工程 2 図面通りに材料に線引きをしましょう。
2 光背	工程 1	
3 台座	工程 1	
4 蓮弁	工程 1	
5 宝冠・腕の飾り	工程 1	
6 白毫(びゃくごう)・顔を描く	工程 1	

木取り	荒起こし	完成

工程 3 コツ 1

ハンマーやノミを使って型紙通りに木取りをしましょう。

工程 4 コツ 2

腕の空間に注意しながら全体の形を整えましょう。

工程 5 コツ 3 コツ 4

細かい部分の自然なラインに気を配りましょう。

火焔の部分の厚さに気をつけましょう。

工程 2

工程 3

火焔模様を美しく仕上げましょう。

表裏からよく見て、曲線の形を整えましょう。

工程 2

各部により作業の内容が異なるので、細かい部分も丁寧に彫りましょう。

工程 3

中心線がずれないように気を配り、芯棒を立てて組みましょう。

工程 2

材料を切らずに直接彫りましょう。

工程 3

きれいな曲面になるように彫りましょう。

工程 4

1 枚ずつ番号を記入して、貼る位置をよく確認しましょう。

工程 2 コツ 5

上下の直径の違いに気をつけましょう。

工程 3

宝冠は透かし彫りで割れないよう、内径と同じ太さの丸棒を入れて当て木にして彫りましょう。

工程 4

細かい部分をよく見て美しく仕上げましょう。

工程 2 コツ 6

穴をあける位置に気をつけましょう。

工程 3

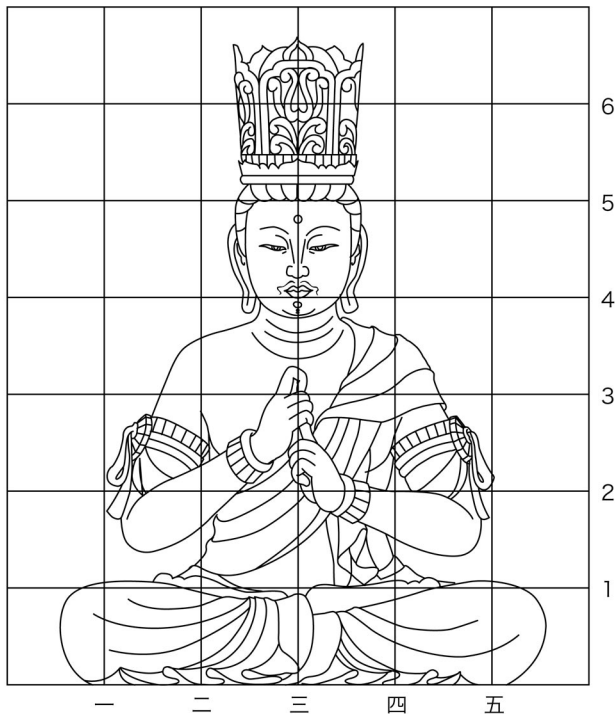
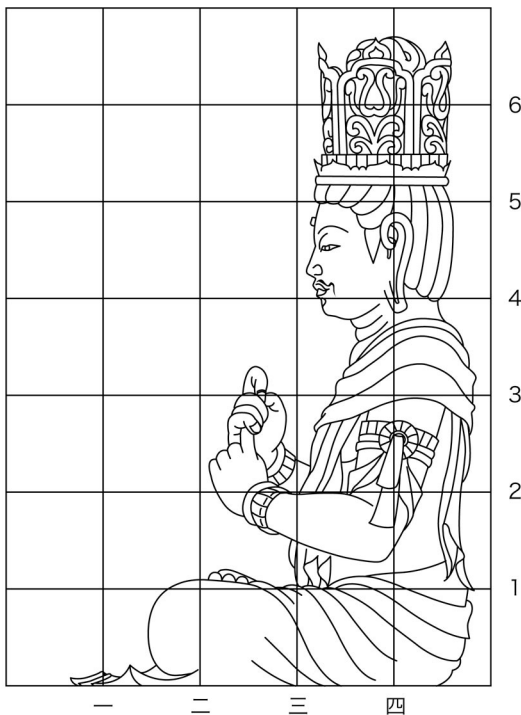
白い絵の具を塗って白毫をつけ、顔を描いて仕上げましょう。

図面

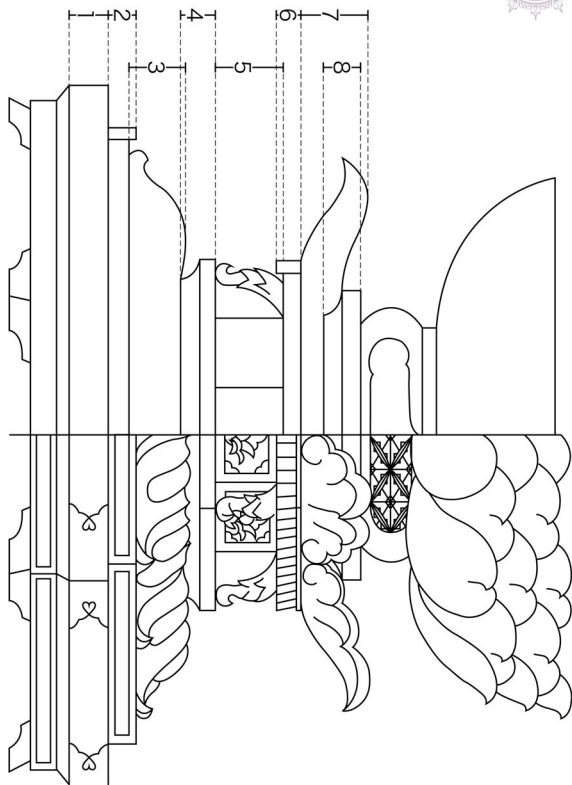
大日如来坐像（本体・原寸）

※そのままコピーして使用してください。

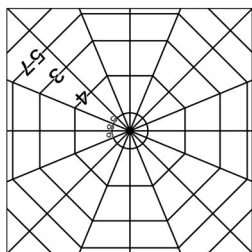
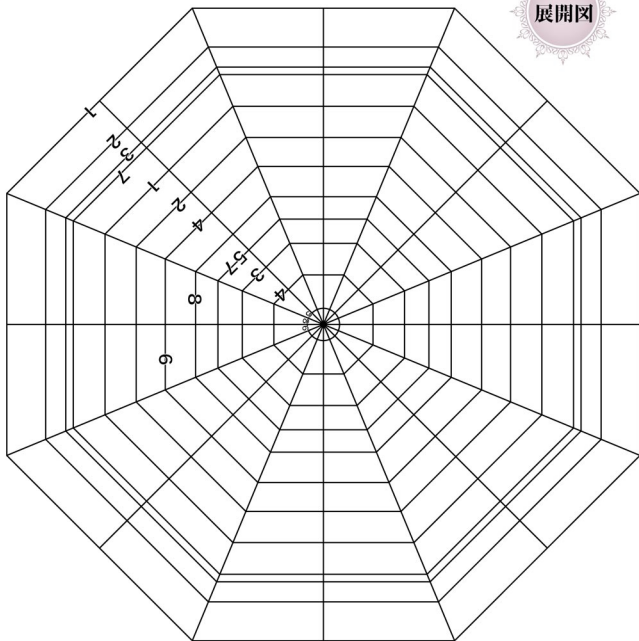
6
5
4
3
2
1

一　二　三　四

※そのままコピーして使用してください。

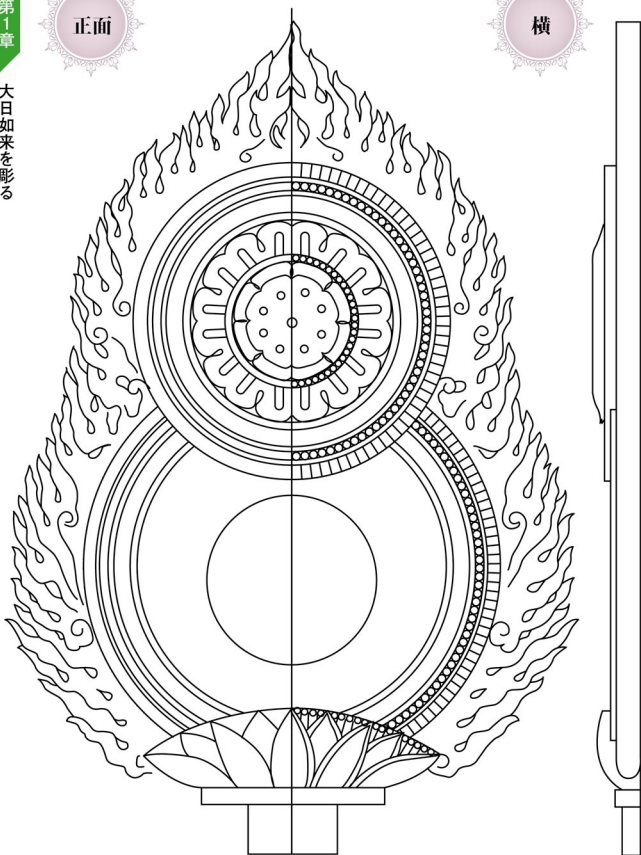
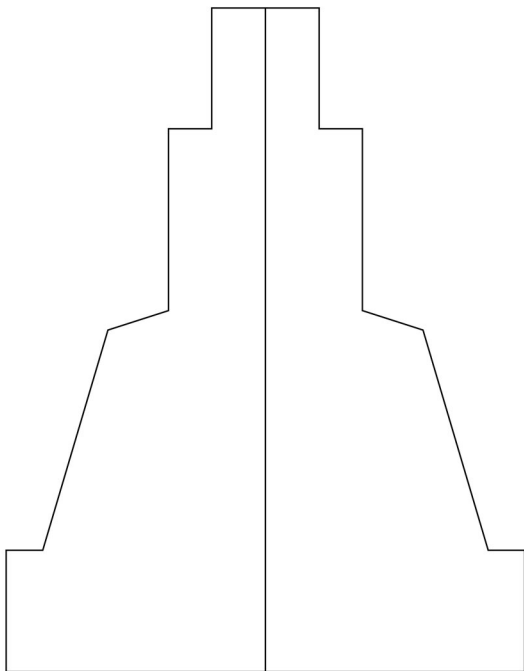
大日如来坐像（台座・原寸）

横

※そのままコピーして使用してください。

大日如来坐像（台座・90%縮小）

展開図

中央部・原寸

※直径176cmになるように、
111%拡大コピーして使用してください。

大日如来坐像（光背・原寸）

※そのままコピーして使用してください。

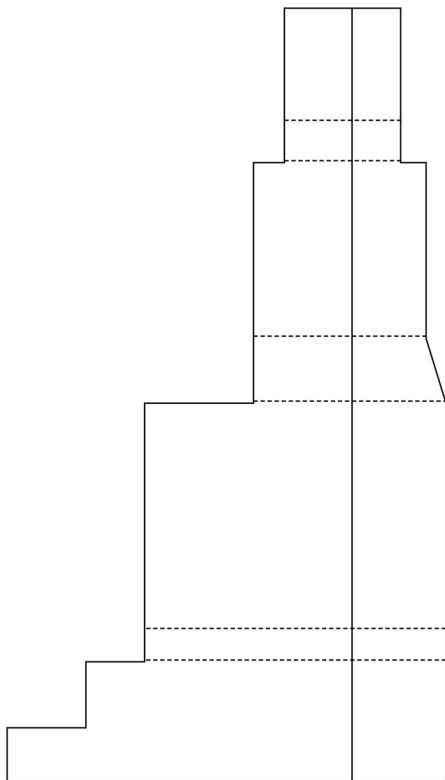
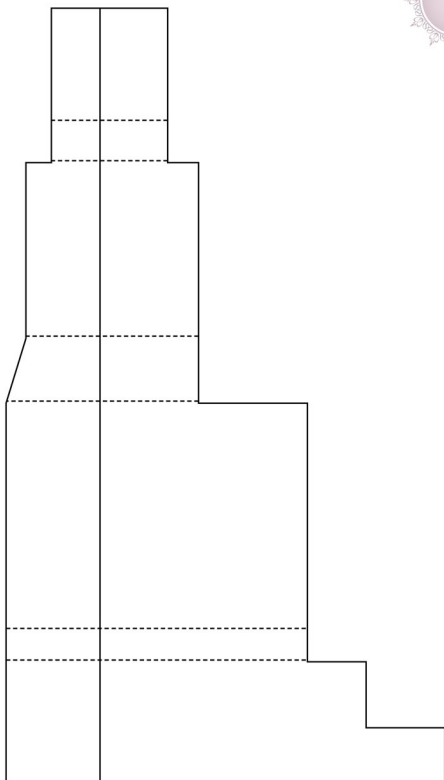
大日如来坐像（本体・原寸）

※そのままコピーして使用してください。

大日如来坐像（本体・原寸）

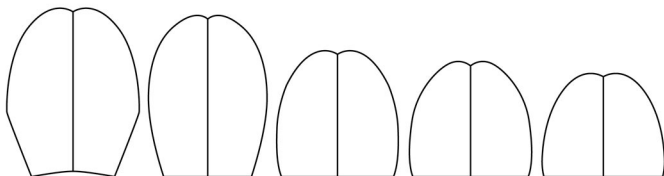
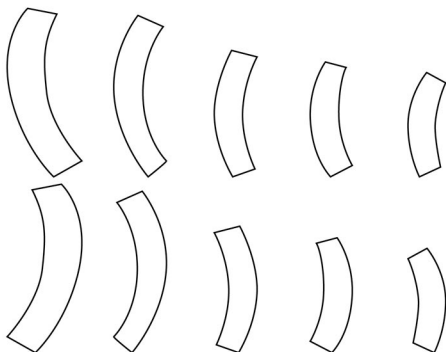
※そのままコピーして使用してください。

大日如来坐像（本体・原寸）

右

※そのままコピーして使用してください。

大日如来坐像（蓮弁・原寸）

横（左）

横（右）

※そのままコピーして使用してください。

コラム1 仏像彫刻の材料と道具

一般的に仏像彫刻の材料にはヒノキが多く使われます。材料をよく見てなるべく木目の整ったものを選び、木目の美しい柾目の部分を正面にして彫りましょう。彫刻刀は作業の内容に応じて使い分けるのが基本です。少しずつ揃えて、美しい作品づくりを目指しましょう。

① 本体

工程1 材料

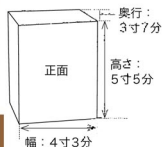
木目がきれいな柾目を正面にしましょう。

寸法図

正面

奥行：3寸7分

高さ：5寸5分

幅：4寸3分

仏師の一言

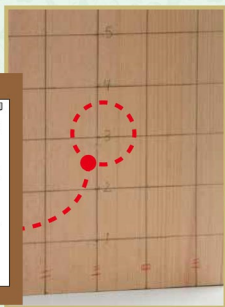
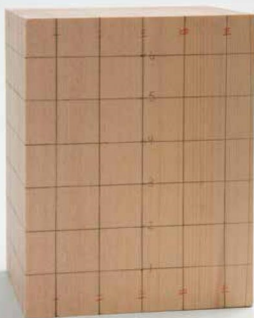
顔に板目が出てしまうので、四方柾（四面とも柾目）の材料はなるべく避けましょう。

工程2 線引き

曲尺、トースカンなどを使って、材料に８分間隔の線を引きます（道具の種類はP70を参照）。線引きの後、前後左右の４面に型紙を当てて、図を写し、木取りをします。

仏師の一言

この時点で線引きがずれてしまうと仕上がりに影響が出てしまうので、注意して正確に引くことが大切です。

※本書では、寸法表記を尺貫法で表示しています。１寸＝約3.03cm　１分＝約3.03mm

正面

仏師の一言

それぞれの面に図面と同様の位置に数字を記入しましょう。縦と横で数字を色分けして記入するとわかりやすくなります。

仏師の一言

すべての面に線を引き終わったら、升目の幅を再確認しましょう。

横

上

場所に応じて適切な道具を使い分ける

木取りにはのこぎり、平刀、叩きノミ、ハンマーなどを使います。まず最初に切り取る部分にのこぎりで切り込みを入れてから、小さい部分は平刀で、大きい部分は当て板の上に材料を置き、叩きノミを当ててハンマーでたたき落とします。木取りの際は大きな音が出るので、作業時間にも配慮しましょう（道具の種類はP70 を参照）。切り落とした部分には、新たに 8 分間隔の線を引き、数字を書き込みます。

まとめ

◎落とす部分にのこぎりで切り込みを入れる
◎大きい部分はハンマーで叩き落とし、小さい部分は手で彫る
◎作業の際は騒音にも配慮する

正面

左

斜め左

左斜め後ろ

後ろ

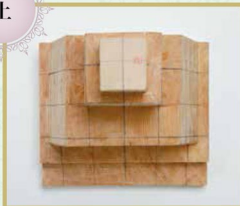
右

右斜め後ろ

斜め右

上

下

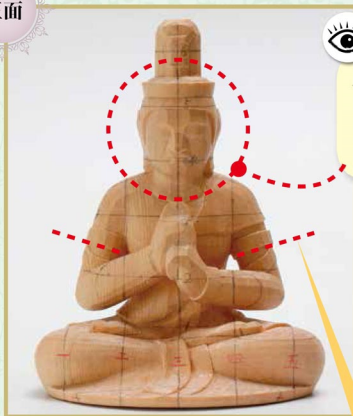
コツ2

腕の空間を意識して 体とのバランスを考えながら彫る

工程4
荒起こし

だいたいの形が決まったら、腕の飾りの下ぎりぎりの部分で腕を切り離し、本体とは別の作業で仕上げます。つなぎ目をきれいに切らないと仕上げの時にずれてしまうので、切り口に注意しましょう。

まとめ

◎常に縦横の線を基準に寸法を取りながら彫る
◎だいたいの形が決まったら腕のつなぎ目をきれいに切る
◎別に仕上げた腕のつなぎ目が本体とずれないよう気をつける

正面

顔を彫る時は、中心線に対して左右対称になるように気をつけましょう。

Check!

全体の荒起こしが終わったら、上の写真の位置で腕を切り離し、手のみ別工程で仕上げの作業をします。つなぎ目がずれないようにきれいに切りましょう。

斜め左

胸と手や腕の間は、キリや細い彫刻刀を使い分けて少しずつ彫りましょう。

仏師の一言

腕の空間は彫刻刀の使い方に注意しながら少しずつ彫りましょう。

仏師の一言

顔と体の位置関係をよく確認して、バランスを整えながら彫りましょう。

ポイント2

耳や口もとが線からずれないように位置を確認して彫りましょう。

ポイント3

腕と体の空間が自然になるよう、斜め後ろからもよく見て確認しましょう。

右斜め後ろ
ポイント4
背中のカーブが自然に見えるように少しずつ彫りましょう。
後ろ
ポイント5
衣の線は深く彫り過ぎないように気をつけましょう。

斜め右
右
ポイント6
手の組み方と指の形をよく見て、この段階で彫り過ぎないように気をつけましょう。
仏師の一言
左右の手の高さの違いを確認しながら彫りましょう。
仏師の一言
背中は、首から腰にかけての曲線を確認しながら彫りましょう。
上
下
ポイント7
下からの形もよく見て彫りましょう。

① 手

コツ3

腕のラインと組んだ指を柔らかく自然に仕上げる

腕の仕上げは、本体の腕の太さと差が出ないようによく見比べながらつながるように彫りましょう。組んだ指がどの角度から見ても自然に印を結んでいるか確認しながら、少しずつ仕上げましょう。腕をはずした本体は、上からよく見て足の組み方や衣のひだやライン、胴の丸みなどを確認し、切り離した腕を再びつける前にきれいに仕上げておきましょう。切り離した腕は、断面中央に穴をあけて芯棒を通し、本体に差し込みます。本体の断面にも同様に穴をあけます。

まとめ

◎本体と腕の太さが同じになるように仕上げる
◎組んだ指が柔らかく自然に見えるように彫る
◎足や衣のひだを美しく仕上げる

正面

ポイント1

切り離した腕が本体と自然につながるように仕上げましょう。

Check!

上

裾

腕をつけると見えにくい部分ですが、見えにくい部分にも気を配って仕上げることで美しい作品に仕上がります。木口は削ると白くなりやすいので、彫刻刀をひんぱんに研いで美しく仕上げましょう。

完成

指の空間はキリなどを使って穴をあけてから、少しずつ広げます。両腕のラインが自然に見えるよう、内側からもよく見て彫りましょう。

本体に正対して見たところ

正面

上

下

ポイント2

指の丸みが自然に見えるようによく見て彫りましょう。

仏師の一言

自分の手で同じ形を作り、よく観察しながら彫りましょう。左手の人差し指が柔らかく握られているように表現するのがポイントです。

本体の内側から見たところ

正面

上

下

ポイント3

腕の下は完成後はほとんど見えない部分ですが、指の細部にも気を配って仕上げましょう。

コツ4

細かい部分が
自然なラインになるように仕上げる

衣のラインが正面から横、横から後ろ…など、どこから見ても自然につながっているかどうかよく確認しましょう。手の甲のふくよかな感じや指先のなだらかな曲線など、細かい部分を丁寧に見て美しく仕上げましょう。

まとめ

◎衣のラインのつながりを自然に仕上げる
◎指先の表現にも気を配る
◎細かい部分をよく見て丁寧に仕上げる

正面

Check!

切り離した腕をしっかり差し込み、本体と自然なラインでつながっているか確認しましょう。

仏師の一言

指や手の甲、腕のふくらみなど曲線を美しく表現しましょう。

ポイント1

本体の左右対称を確認し、顔を穏やかな表情に仕上げましょう。

Check!

腕をつけた位置が自然につながり、腕が美しく見えるか確認しましょう。

左斜め後ろ

左

ポイント2

白毫をつけた位置が正しいか確認しておきましょう。

仏師の一言

衣のひだの重なりが自然に表現できているか確認しましょう。

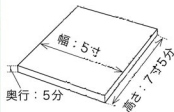
背中のカーブに沿って衣のラインが自然に流れているか確認しましょう。

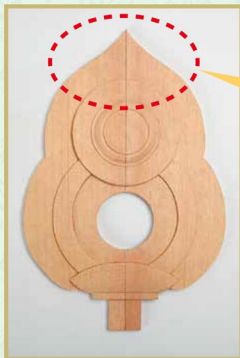
仏師の一言

木口は削ると白くなりやすいので、彫刻刀をひんぱんに研いで美しく仕上げましょう。

② 光背

工程 1 材料

木目がきれいな柾目を正面にしましょう。

工程 2 荒起こし

円の重なり方をよく確認し、立体感をつけましょう。穴を開けた部分がきれいな円になるように縁を整えましょう。

Check!

この段階で、火焔になる部分が薄くなり過ぎないように気をつけましょう。

※本書では、寸法表記を尺貫法で表示しています。1寸＝約3.03cm　1分＝約3.03mm

火焔模様は重なりをよく見て、上になる部分と下になる部分が互い違いになるように動きをつけて、丁寧に仕上げましょう。

正面

後ろ

ポイント1

中央の蓮弁の端のカーブやふくらみなどをよく見て、全体に立体感が出るように彫りましょう。

仏師の一言

ひとつひとつの火焔の先端の動きをよく見て、変化が出るように仕上げましょう。

③ 台座

小脚の材料

今回制作するのは、如来像の台座として最も多く見られる「蓮華座」という形式です。大小さまざまな部分で構成されているので、展開図をよく見て、寸法通りに木取りしましょう。

・芯棒の部材／高さ7分　幅9分　奥行9分
・芯棒／直径3分　長さ3寸

台座の底には芯棒を立て、全体を重ねて固定します。下框の角には、小脚と金具をつけて仕上げます（P36参照）。

台座各部の名称

蓮台
上敷茄子
受座
華盤
受座
下敷茄子
受座
反花
上框
下框

※本書では、寸法表記を尺貫法で表示しています。1寸＝約3.03cm　1分＝約3.03mm

下框、小脚

材料　下框は木取りした後、８枚の板を八角形に貼り合わせます。内部の４辺に下框と上框を組み合わせるための部材を貼ります。

仏師の一言

完成した時に正面になる面を決め、印をつけておきましょう。

荒起こし　中央に芯棒を立てるための部材を貼ります。

Check!

下の側面には縁取りを彫ります。

上

下

小脚を彫ります。接地面及び曲線の形をよく見て彫りましょう。

完成

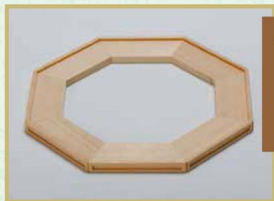
小脚は下框よりも少し内側に貼りましょう。

仏師の一言

金具をつけるための釘は、あらかじめキリなどで穴をあけてから打ち込みましょう。

縁取りの角が曲線になるように整えます。小脚を角の８ヶ所に貼り、金具をつけて仕上げてから、中心に芯棒を立てます。

上框（かまち）

材料 木取りした後、8枚の板を八角形に貼り合わせてから、側面に縁板を貼ります。

仏師の一言

完成した時に正面になる面を決め、印をつけておきましょう。

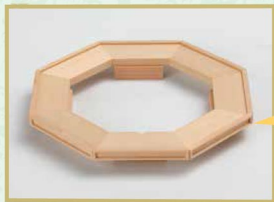
荒起こし 下框と同様に側面に縁取りを彫ります。

縁の幅が一定になるように仕上げましょう。

完成 下框と互い違いに組み合うように、４辺に上下を組み合わせるための部材を貼ります。

縁取りの角が丸くなるように整えます。

反花（かえりばな）

材料

木取りした後、８枚の板を八角形に貼り合わせてから、模様を描きます。

仏師の一言

完成した時に正面になる面を決め、印をつけておきましょう。

荒起こし

蓮弁を２段になるように彫ります。

Check!

花弁の曲線の形と、先端の反りの形をよく見て彫りましょう。

完成

全体のバランスを見ながら花弁を整えます。

Check!

先端の反りが同じ形になるように気をつけましょう。

仏師の一言

模様は同じ形が並ぶように、よく見て確認しましょう。側面の厚みを一定にして、トップラインの流れをよく見てきれいに仕上げましょう。

［参考］框と反花の組み方

下框と反花の４辺に同じ寸法の部材を貼り、間に上框を挟んで互い違いになるように重ねて台座を組みます。

反花

上框

下框

下敷茄子（したしきなす）

材料　木取りした後、８枚の板を八角形に貼り合わせてから、模様を描いて彫り込みます。

荒起こし　側面に模様を描き写し、浮き彫りにします。

正面

Check!

最初に深い面から彫り、次に浅い面を彫りましょう。

完成　模様と縁取りの細部を整えます。細かいので、少しずつ丁寧に彫って仕上げましょう。

斜め上

正面

仏師の一言

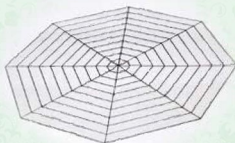
細かな細工を行うため、彫刻刀を使い分けて仕上げましょう。花と底板の境目をすっきりと仕上げることで、陰影がはっきりします。

受座、華足（けそく）

受座は木取りした後、８枚の板を八角形に貼り合わせます。
上になる受座は中央に芯棒を通す穴をあけます。

華足の材料

木取り

華足を木取りして、中心線を引きます。

荒起こし 上になる受座の側面に切り込みを入れます。

切り込みの幅が一定になるように気をつけましょう。

完 成 曲線のカーブと向き、厚みをよく見て華足の模様を仕上げます。

受座の切り込みを整え、華足をそれぞれの角に貼ります。華足は正面を間違えないように貼りましょう。

下になる受座は、下部が曲線になるように整えて仕上げます。

華盤（けばん）

材料 上から見て、台形を彫り出してから形を作っていきます。

仏師の一言

華盤は複雑な形をしているので、あらゆる方向からよく見て彫りましょう。

荒起こし 仕上がりの形をイメージしながら両面が曲面になるように彫り、図面の模様を写します。

表

裏

仏師の一言

ノギスやトースカンを使い、均等になるように彫りましょう。写し紙などを使って、図面と同じ模様を描き写しましょう。

Check!

横

先端の反りの左右の形をよく見て彫りましょう。

完成

全体のバランスを見ながら模様を仕上げます。

表

仏師の一言

きれいな曲線が美しく見せるポイントです。いろいろな角度からよく見て、美しい曲線になるように、横から見た時の曲線の上下の流れに気をつけましょう。

横

先端の反りが左右同じ形になるように気をつけましょう。

裏

上敷茄子(うえしきなす)・受座

材料

受座は木取りした後、８枚の板を貼り合わせて八角形を作り、中央に芯棒を通す穴をあけます。

荒起こし

上敷茄子は中央に芯棒を通す穴をあけ、仕上がりの形をイメージしながら側面が曲面になるように彫ります。

仏師の一言

上敷茄子は、きれいな丸みになるように丁寧に形を作りましょう。

完成

上敷茄子の側面に模様を彫って仕上げます。

細かい模様を丸みのある部分に彫るので、少しずつ丁寧に彫りましょう。

仏師の一言

曲面に彫るため、逆目（木の外側に向かう木目の流れ）に気をつけましょう。

蓮台

材料

木取りをしたら材料をよく見て、柾目が横になるように正面になる面を決めましょう。

荒起こし

形を彫り終わったら、蓮弁を貼る位置に正面を基準に18 等分に線を引きます。

斜め上

横

完成

縁に模様を彫り、光背を差し込むための穴をあけます。

斜め上

Check!

下

写真のように、側面に蓮弁を貼りつける位置を記入しましょう。「1-1」とは、1段目の1枚目を貼りつける場所です（P46 参照）。底の中心には芯棒を通す穴をあけます。

④ 蓮弁

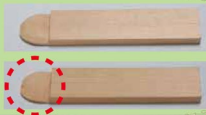
1段目
2段目
3段目
4段目
5段目
1 2 3 4 5 6 7 8 9

蓮弁は全部で5段あり、下から上に向かって少しずつ小さくなります。各段の蓮弁の大きさと貼る位置を間違えないように気をつけましょう。

型紙を参照して図を写し、木取りをします。中心線を引いてから切らずに直接彫ります。

仏師の一言

蓮弁は小さく彫りにくいので、材料を持って作業できる部分を残したまま彫り進めましょう。

仕上がりの形をイメージしながら、両面が曲面になるように少しずつ彫りましょう。仕上げてから1枚ずつ切り離します。

裏

表

仏師の一言

先端の反り具合をよく見て仕上げましょう。

仕上げた蓮弁を材料から切り離し、切り口をきれいに整えます。蓮台に貼る際の目安にするため、下の中心に印をつけます。

それぞれの蓮弁の裏に、P45と同じ番号を記入します。「1-1」とは、1段目の1枚目という意味です。番号通りに蓮台の正しい位置に貼りましょう。

5 宝冠・腕の飾り

工程1

材料

木目がきれいな柾目を正面にしましょう。

・宝冠／高さ1寸1分　幅1寸1分　奥行1寸2分

・腕の飾り／高さ1寸1分　幅4分　奥行3分

工程2

木取り

宝冠は木取りをして十字に印をつけます。上下の直径は同じ大きさではなく、下が上よりもやや細くなっているので気をつけましょう。

工程3

荒起こし

コツ5

宝冠の透かし彫りは当て木をして彫る

宝冠は厚さが薄いので、そのまま模様を彫ると力を入れた時に折れたり欠けたりしやすくなります。宝冠の内径と同じサイズの丸棒に宝冠を入れ、丸棒を当て木にしながら彫ると失敗がなく、きれいに模様を彫ることができます。

宝冠は模様を写して内径をくり抜き、宝冠の形になるように上部を切ります。この時点で頭にのせて寸法を合わせておきましょう。当て木の丸棒に宝冠を入れ、模様を透かし彫りにします。

仏師の一言

裏側からも細い小刀などで模様の角を削ると、品よく仕上がります。

腕の飾りは荒起こしし、中心線を引きます。

工程4

完成

宝冠はどこから見ても同じに見えるように仕上げます。腕の飾りは、ひだの部分の重なりをよく見て、形を美しく整えましょう。

※本書では、寸法表記を尺貫法で表示しています。1寸＝約3.03cm　1分＝約3.03mm

6 白毫

工程1 材料

白毫はガラス製です。先端の細い方を本体につけます。

コツ6

工程2 仕上げ

白毫を正しい位置に入れる

白毫は額の左右の中心に入れます。一般的には、眉の一番高いところを結んだ線上に白毫の下が合うように入れます。

白毫を入れる位置を確認し、キリで穴をあけます。

白毫の底と縁まわり、額の穴に白い絵の具を塗ります。

工程3 完成

横

少しだけ突起するように、本体に白毫をつけます。

6 顔を描く

水乾絵の具、水彩絵の具、墨などで完成した本体に顔を描きます。にじみやすいので細い筆を使い、十分に水分をしごいてから描きましょう。

仏師の一言

白木の場合、色を少し薄めに描くのがポイントです。

全体を組む

台座に本体を置き、光背をしっかり差し込みます。

※台座の組み方は、P10の図面を参照してください。

仏師の一言

光背が傾かないように気をつけましょう。

仏師の一言

最後に彫り残しがないか、光の当て方を変えて全体をよく見て確認しましょう。

仏師の一言

すべてが中心に来るように気をつけましょう。最後に曲尺を置き、左右のバランスを再確認しましょう。

台座の各部と本体の中心線にずれがないか、よく確認しましょう。

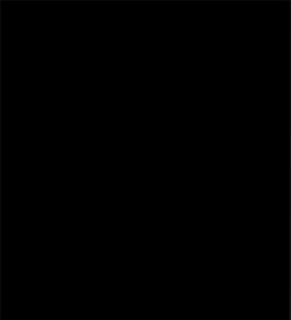
完成　大日如来坐像

正面

斜め左

斜め右

左斜め後ろ

右斜め後ろ

斜め下

斜め上

第２章
阿弥陀如来を彫る

凛とした立ち姿が美しい阿弥陀如来は、
静かな存在感に圧倒されます。
美しくカーブした光背のきめ細かい模様は、
完成時をイメージしながら彫りましょう。

阿弥陀如来立像
[制作工程]

・図面　P56 ～ 61
・型紙　P62 ～ 63

阿弥陀如来は、全身を包む流れるような衣のラインを自然に表現することが大切です。手の向きや角度にも気を配り、全体のバランスに配慮しながらトータルな美しさが出るように彫りましょう。

	材料	線引き
1 本体	工程1	工程2 図面通りに材料に線引きをしましょう。
2 手	工程1	
3 光背	工程1	
4 台座	工程1	
5 下駄	工程1	工程2
6 白毫と肉髻珠（にっけいしゅ）	工程1	

木取り	荒起こし	完成

工程3 コツ7

ハンマーやノミを使って型紙通りに木取りをしましょう。

工程4 コツ8

両手の高さに気を配りましょう。

頭部と胴体のバランスに配慮し、螺髪を細かく彫りましょう。

工程5 コツ11

工程2

のこぎりや小刀で木取りをしましょう。

工程3 コツ9

手の形と指のバランスをよく見て彫りましょう。

工程4 コツ10

指先の表情にも気を配りましょう。

仕上がりをイメージして左右の曲線を整えましょう。

工程2

透かし彫りは模様をよく見て丁寧に仕上げましょう。

工程3 コツ12

蓮台に芯棒を立てて固定し、台座を組みましょう。

工程2

蓮弁の曲線と反りの部分をよく見て彫りましょう。

コツ13 工程3

細部まで丁寧に仕上げて中心がずれないように組みましょう。

本体の足の裏に下駄をつける位置を書き込みましょう。

斜めの部分を本体にしっかり差し込み、安定させましょう。

工程3

コツ14

工程2

肉髻珠をつける位置にに赤い絵の具を塗ります。

工程3

白毫と肉髻珠が一直線になるように入れましょう。

阿弥陀如来立像（本体・60%縮小）

10
9
8
7
6
5
4
3
2
1

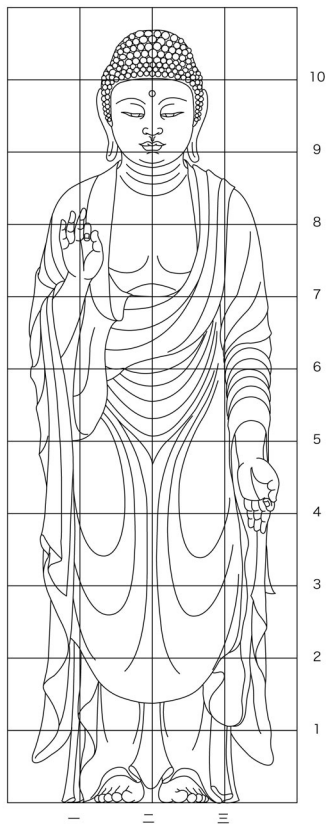
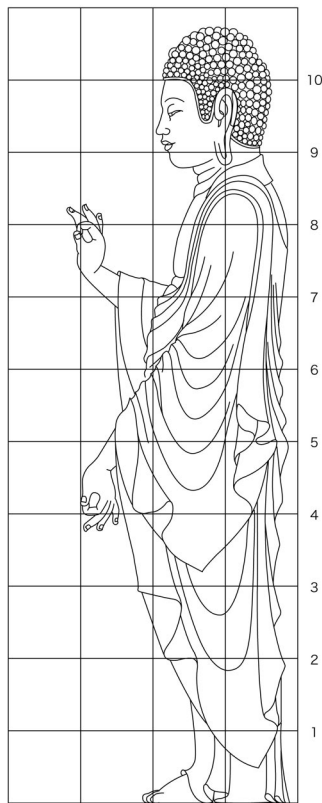
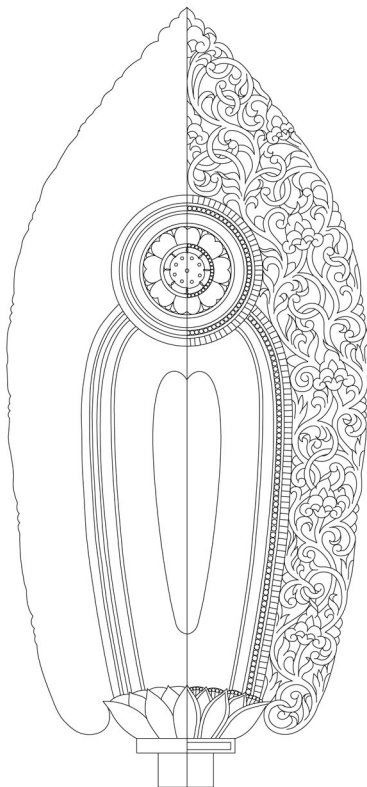
一　二　三

※天地333mm（升目の天地）になるように、167%拡大コピーして使用してください。

10
9
8
7
6
5
4
3
2
1

一　二

※天地333mm（升目の天地）になるように、167%拡大コピーして使用してください。

阿弥陀如来立像（光背・40%縮小）

※天地489mmになるように、250%拡大コピーして使用してください。

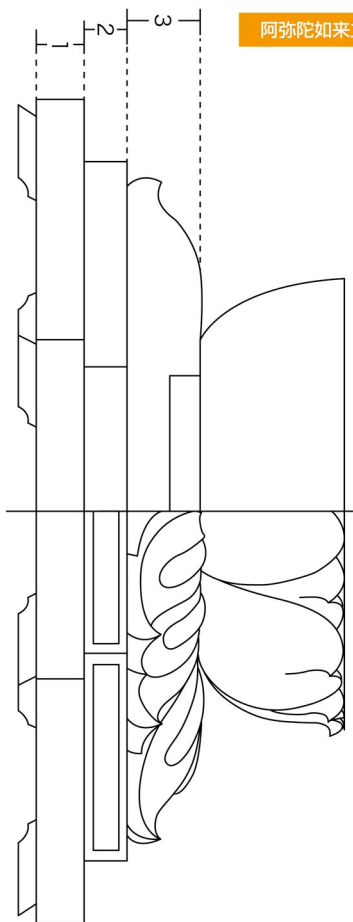
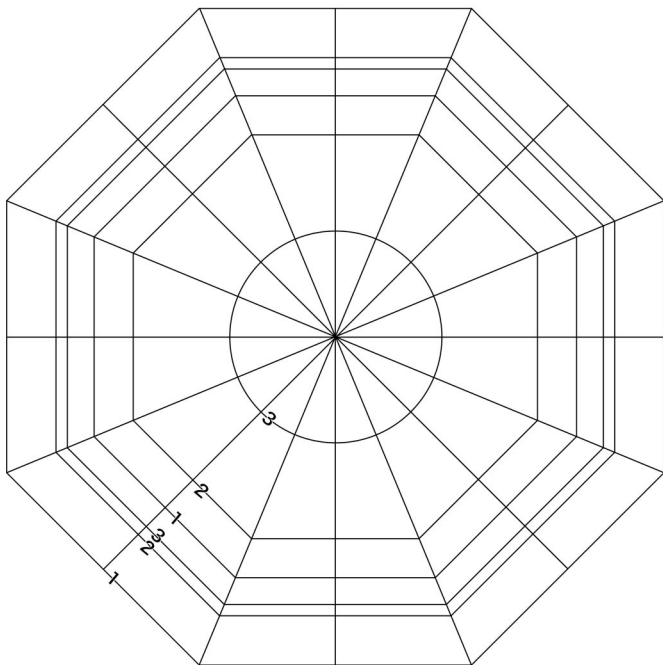
※天地489mmになるように、250%拡大コピーして使用してください。

阿弥陀如来立像（台座・原寸）

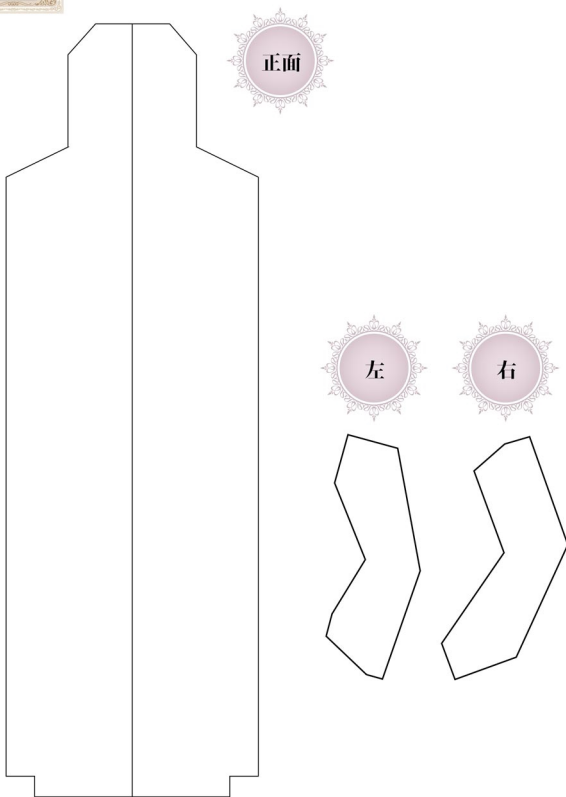
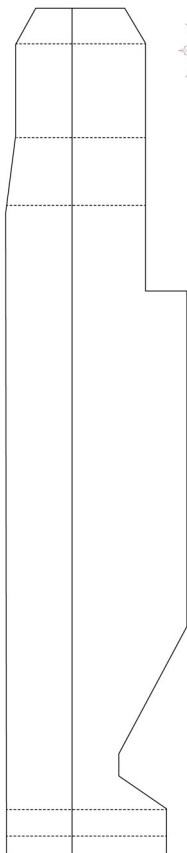
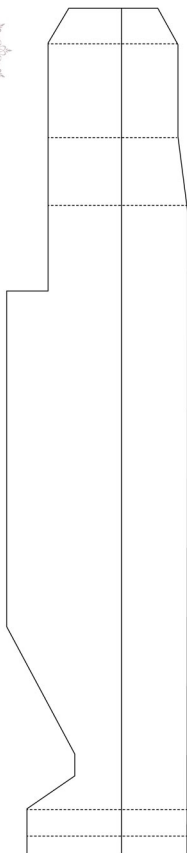
横

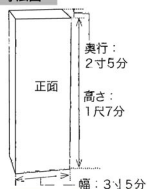
 ※そのままコピーして使用してください。

阿弥陀如来立像（台座・80%縮小）

3
2
1
3
2
1

※直径206mmになるように、125%拡大コピーして使用してください。

型　紙

阿弥陀如来立像（本体・60％縮小、手・原寸）

※本体は天地323mmになるように、167％拡大コピーして使用してください。
手はそのままコピーして使用してください。

※点線の部分で折り、材料に合わせます。
天地354mmになるように、167%拡大コピーして使用してください。

① 本体

木目がきれいな柾目を正面にしましょう。

曲尺、トースカンなどを使って、材料に1寸間隔の線を引きます（道具の種類はP70を参照）。線引きの後、前後左右の4面に型紙を当てて、図を写し、木取りをします。

仏師の一言

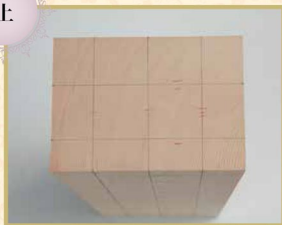
この時点で線引きがずれてしまうと仕上がりに影響が出てしまうので、注意して正確に引くことが大切です。

※本書では、寸法表記を尺貫法で表示しています。1尺＝約30.3cm　1寸＝約3.03cm　1分＝約3.03mm

横

正面

後ろ

上

仏師の一言

すべての面に線を引き終わったら、升目の幅を再確認しましょう。

仏師の一言

それぞれの面に図面と同様の位置に数字を記入しましょう。縦と横で数字を色分けして記入するとわかりやすくなります。

コラム2 逆目(さかめ)とならい目

木の外側に向かう木目の流れを「逆目」、内側に向かう木目の流れを「ならい目」と呼びます。仏像彫刻では、常にならい目に向かって彫るのが基本です。

ならい目で彫っている時は彫刻刀がスムーズに動き、彫り跡も美しく仕上がりますが、逆目で彫ると彫刻刀の刃が木に引っかかり、切り口がガサガサしたり、割れたりする原因になってしまいます。彫刻刀の刃先で少しだけ表面を探って、刃が引っかかるようであれば逆目です。逆目の場合は彫る向きを変えてから彫るようにしましょう。

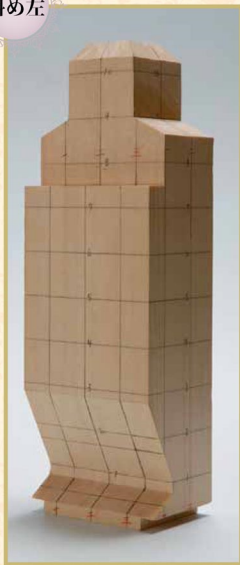
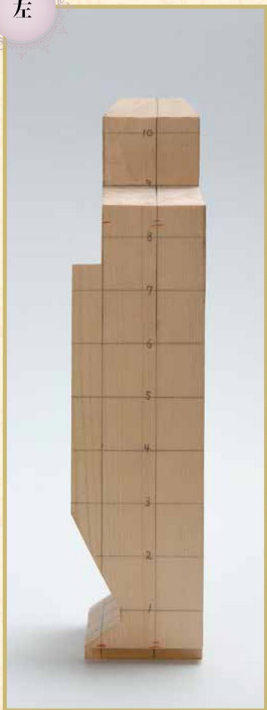
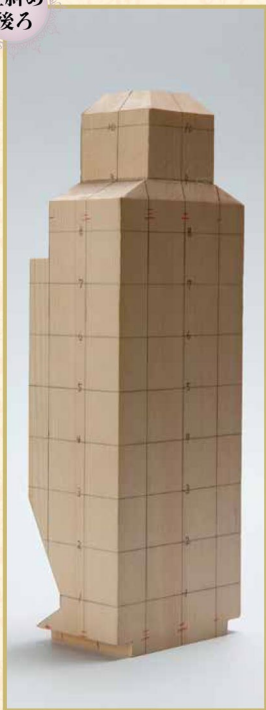
コツ7

左右対称になるよう正確に木取りする

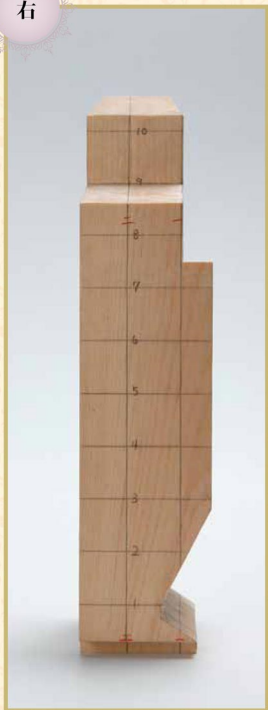
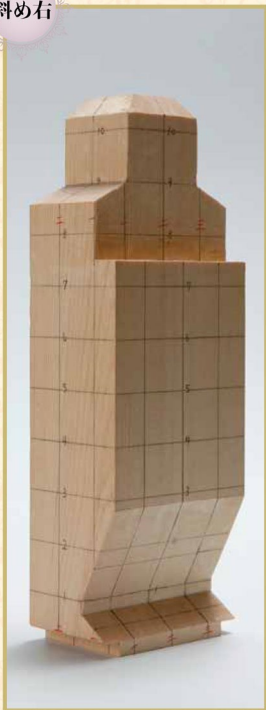
大日如来像と同様に、木取りにはのこぎり、平刀、叩きノミ、ハンマーなどを使います。全体をよく見て、型紙通り左右対称になるように木取りしましょう。切り落とした部分には新たに１寸間隔の線を引き、数字を書き込みます。

まとめ

◎左右対称を常に念頭に置く
◎木取りの後、消えた線をつなぎ合わせる
◎場所によって道具を使い分ける

左

後ろ

右斜め後ろ

右

斜め右

上

下

コラム3 木取りに使う道具

材料に型紙を写す前には、曲尺やトースカンを使って材料に図面と同じ1寸間隔の線を引きます。ここで基準の線がずれてしまうと全体の仕上がりに影響するので、丁寧に正確に引きましょう。すべての面に線を引いたら型紙を写し取り、不要な部分を切り落とします。場所に応じて平刀、叩きノミ、ハンマーを使い分けて、削り過ぎないように注意して木取りしましょう。

コツ8

全身のバランスを見ながら少しずつ整える

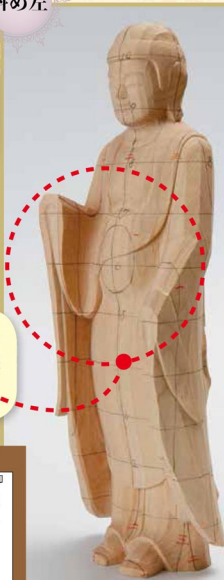
背中のカーブ、両手の上下の位置、肩の厚み…など、全身のバランスを見ながら少しずつ全体を彫りましょう。背中は中心線に対して左右対称になっているか常に確認しながら彫りましょう。

まとめ

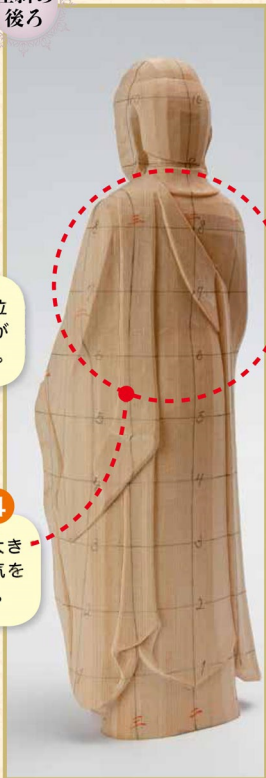
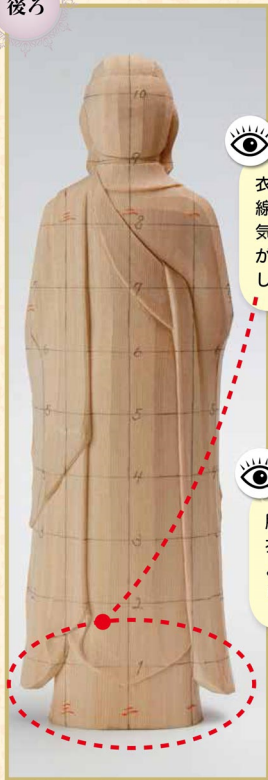
◎衣のしわのカーブを美しく彫る
◎体と頭のバランスにも気を配る
◎肩や背中のカーブのラインをよく見て彫る

正面

斜め左

ポイント1
中心線に対して左右対称になるように気をつけましょう。

ポイント2
上下の手の高さに気をつけて彫りましょう。

仏師の一言
まず最初に、大きなしわの部分から彫り始めましょう。

左
左斜め後ろ
ポイント3
頭部と胴体の位置を確認しながら彫りましょう。
ポイント4
衣のひだの大きさと流れに気をつけましょう。

後ろ
右斜め後ろ
ポイント5
衣の裾の曲線と高さに気をつけながら彫りましょう。
ポイント6
腕の高さと衣の流れをよく見て彫りましょう。

仏師の一言

全体を回転させながら、衣や体の曲線をよく見て彫りましょう。

仏師の一言

頭の前後の丸みもよく見て彫りましょう。

※手は別に彫り、最後に本体と組み合わせます。

② 手

コツ9

本体につけた時の形をイメージして彫る

阿弥陀如来では大日如来のように荒起こしをしてから手を切り離し、別作業で仕上げるのではないので、本体とのバランスを考えながら彫りましょう。左右の手の幅や長さが同じになるように、注意して仕上げましょう。

まとめ

◎本体とのバランスを常に考える
◎指先の表情に気を配る
◎手のひらの柔らかさを自然に表現する

・左手／高さ１寸９分　幅６分　奥行９分
・右手／高さ１寸７分　幅６分　奥行１寸３分

完成した時に正面になるのはⒷの面ですが、本書では作業工程をわかりやすく説明するためにⒶの面を正面にして撮影しています。

左手

木取り

完成した時に正面になるのが斜め右から見た写真です。

正面

左斜め後ろ

後ろ

斜め左

斜め右

※本書では、寸法表記を尺貫法で表示しています。１寸＝約3.03cm　１分＝約3.03mm

指と指との間を広げ過ぎないように注意しながら、少しずつ指を細くしていきます。縵網相（指と指との間にある水かきのようなもの）に気をつけて彫り進めましょう。

完成

指の空間はキリなどを使って穴をあけてから、少しずつ広げます。指の丸みが自然に見えるようによく見て彫りましょう。

※作業工程をわかりやすく説明するために、当て木に貼りつけて撮影しています。

正面

左斜め後ろ

後ろ

仏師の一言

指の根元よりも指先が細くなるように彫りましょう。

斜め左

斜め右

上

右手

木取り

完成した時に正面になるのが斜め右から見た写真です。

荒起こし

本体と腕とが接する面を確認しながら、腕を細くしすぎないように注意して彫りましょう。

完成

本体と腕とが接する面を確認しながら、すき間がないように少しずつ合わせていきます。指の空間はキリなどを使って穴をあけてから、少しずつ広げます。指の丸みが自然に見えるようによく見て彫りましょう。

※作業工程をわかりやすく説明するために、当て木に貼りつけて撮影しています。

仏師の一言

指の関節の刻みは浅く彫り、柔らかさを表現しましょう。爪の大きさにも気をつけましょう。

正面

左斜め後ろ

後ろ

斜め左

斜め右

上

1 本体 2 手 手をつける

コツ10

自然な流れになるように手をつける

完成した手を腕につけた時に、不自然に指や手のひらがねじれて見えないように全体の流れを常にイメージしながら彫るようにしましょう。

まとめ

◎両手のひらの向きに気を配る
◎腕のラインが自然になるように組み立てる
◎本体と手のすき間が空きすぎないようにする

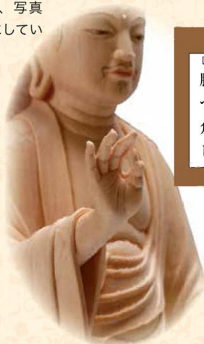
左手

手の位置をわかりやすく示すために当て木に貼りつけ、写真の天地を逆にしています。

仏師の一言

腕が自然な角度でつくよう、芯棒の角度に気をつけましょう。

ポイント1

本体の芯棒に左手の穴をしっかり差し込みます。

手の位置をわかりやすく示すために、当て木に貼りつけています。

仏師の一言

腕が自然な角度でつくよう、芯棒の角度に気をつけましょう。

本体の芯棒に右手の穴をしっかり差し込みます。

仏師の一言

本体と手のすき間を大きくあけ過ぎないように気をつけましょう。

足のふくらみを表現するための大切な衣のひだです。きれいな流れを意識して彫りましょう。

コツ11

全体が調和した
穏やかな雰囲気になるように仕上げる

阿弥陀如来とは、「すべての衆生を救う」とされている慈悲深い仏です。衣のラインを柔らかく仕上げて、慈愛に満ちた優しさと、ごく自然にその場にたたずんでいるような雰囲気が出るように仕上げましょう。

まとめ

◎衣が自然なラインになるように仕上げる
◎あらゆる角度からよく見て全体のバランスを整える
◎上下の手の高さにも気を配る

正面

斜め左

仏師の一言

両手のひらは、少し内側に向けるのがポイントです。

ポイント1

全身を覆う衣のラインが裾まで美しく流れているか確認しましょう。

ポイント2

上下の手の位置と向きを確認しましょう。

左

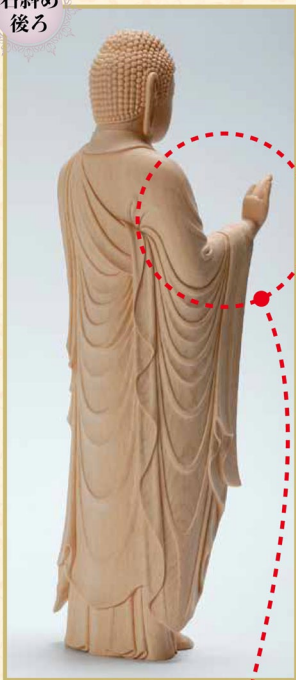
肩から背中のラインと、衣の流れを確認しましょう。

衣のひだの重なり方を確認しましょう。

ポイント5

右脇の衣の重なりと、そこからのひだの流れを確認しましょう。

後ろ

右斜め後ろ

右手の表情と腕のラインを確認しましょう。

右

ポイント7

頭部と体のバランス、上下の手の高さを確認しましょう。

斜め右

ポイント8

胴のゆるやかなラインと、衣のひだの深さを確認しましょう。

仏師の一言

袖の流れは少し末広がりになるように仕上げましょう。

螺髪（らほつ）の流れと、頭部と胴体の位置関係を確認しましょう。

ポイント10

下駄の切り込みと衣の裾の広がり方を確認しましょう。

コラム4 彫刻刀の研ぎ方

彫刻刀を研ぐためには、裏刃用のダイヤモンド砥石、表刃用の中砥、仕上げ用の仕上げ砥、丸刀用の中砥、丸刀用の仕上げ砥を用意するといいでしょう。まず裏刃を研ぎ（写真上）、次に表刃を研ぎます（写真下）。研ぐ前には砥石を水で濡らし、利き手で彫刻刀の柄をしっかり持ってもう片方の手を刃に添えます。刃を当てた角度が常に一定になるように注意しながらゆっくりと動かして研ぎましょう。

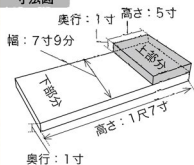
切れない彫刻刀を使い続けているとケガの原因になる場合もあります。日頃から刃の状態に気を配り、常に切れ味を良好に保つようにしましょう。

ダイヤモンド砥石（裏刃用）

中砥（表刃用）

❸ 光背

工程1 材料

数枚の板を貼り合わせて使います。木目がきれいな柾目を正面にしましょう。

工程2 荒起こし

左右対称になるように注意して、全体が緩やかなカーブを描くように曲面を彫ります。

表

裏

仏師の一言

図面と照らし合わせて、唐草の部分に何ヶ所か穴をあけて厚みを確認しましょう。

※本書では、寸法表記を尺貫法で表示しています。1寸＝約3.03cm　1分＝約3.03mm

全体をよく見て美しい曲面になるように彫る

阿弥陀如来の光背は、本体を包み込むようにゆるやかなカーブを描いています。全体をよく見て、左右対称になるように少しずつ曲面を整えながら彫りましょう。

まとめ

◎左右対称になるよう左右の曲面を揃える
◎光背の先端の曲線を美しく整える
◎厚さが均等になるよう手で確かめながら彫る

光背の先に向かう立ち上がりの曲線に注意しましょう。

上(表)

下(表)

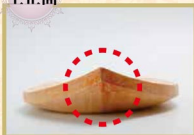
上(裏)

すき間をよく見て、左右を合わせましょう。

下(裏)

下から見て左右対称の流れを確認しましょう。

上から全体(表)

上正面

手でさわりながら厚みを確認しましょう。

全体(表)

透かし模様の部分は重なり部分をよく見て、上になる部分と下になる部分を間違えないように気をつけながら仕上げましょう。

この方向からもよく見て、先端に向かう左右の流れをよく確認しましょう。

横(表)

美しい曲線になるように気をつけて仕上げましょう。

唐草模様は、蔓(つた)の部分が浅くへこんでいるように彫りましょう。

仏師の一言

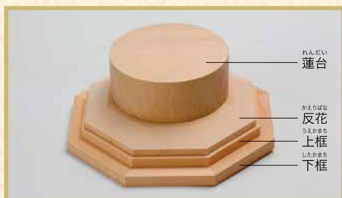
裏側は品よく見せるために角を取って仕上げましょう。

④ 台座

工程1 材料

大日如来と同じ蓮華座の一種です。蓮台の底には芯棒を立てて固定し、一番下になる八角形の下框の角には、小脚と金具をつけて仕上げます。蓮台はきれいな円柱になるように木取りをしましょう。

台座各部の名称

下框（かまち）、小脚（こあし）

荒起こし

木取りした後、縁に８枚の板を貼り合わせます。内側の４辺に上下を組み合わせるための部材を貼ります。

小脚を彫ります。接地面及び曲線の形をよく見て彫りましょう。

仏師の一言

小脚は、左右対称になるように彫りましょう。

完 成

小脚を角の8か所に貼り、金具をつけて仕上げます。

Check!

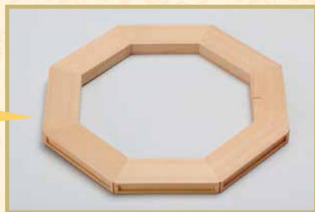
金具は下框の天地中心に、曲がらないようにつけましょう。

上框（かまち）

Check!

木取りした後、８枚の板を八角形に貼り合わせてから、側面に縁板を貼ります。完成した時に正面になる面を決めて印をつけ、側面に縁取りを彫ります。

荒起こし

深さが均等になるよう、平らな彫刻刀で整えましょう。

完 成

縁取りの角が丸くなるように整えます。

反花

コツ13

工程２
荒起こし

花弁のカーブを美しく整える

蓮華座は蓮の花を様式化した台座なので、蓮台には花弁をモチーフにした装飾模様が彫られます。花弁の曲線の形と、先端の反りの形が同じになるように、よく見比べながら彫りましょう。

まとめ

◎左右対称を常に念頭に置く
◎斜めの切り込みの角度を揃える
◎場所によって道具を使い分ける

Check!

まず目玉の部分から彫り起こします。側面の厚みが一定になるように気をつけながら、花弁の反りをきれいに彫り出します。

仏師の一言

各部の形が同じになるように注意して、よく見比べながら彫りましょう。

Check!

先端の反りが同じ形になるように気をつけましょう。

完成

全体のバランスを見ながら花弁を整えます。

[参考] 框と反花の組み方

下框と反花の４辺に同じ寸法の部材を貼り、互い違いになるように重ねて台座を組みます。

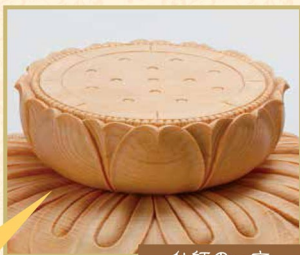
蓮台

荒起こし 蓮台の曲面に沿わせるようにして、二段の蓮弁を少しずつ彫りましょう。

底の中心に芯棒を通す穴をあけます。芯棒は部材の穴に木工ボンドで接着します。

・芯棒の部材／高さ7分　幅9分　奥行9分
・芯棒／直径3分　長さ1寸

完成 組んだ時に上になる面に模様を彫り、蓮弁の形を整えます。

蓮台と反花のすき間があかないように気をつけましょう。

仏師の一言

花弁の反りが同じになるように気をつけ、花弁同士の境目を小刀ですっきりと仕上げるとメリハリがつきます。

※本書では、寸法表記を尺貫法で表示しています。1寸＝約3.03cm　1分＝約3.03mm

5 下駄

切り口が斜めになるように材料を2つに切ります。

・高さ2寸
・幅8分
・奥行2分

木取り

本体の足の裏に下駄を差し込むための印をつけます。

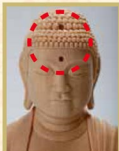
下駄を差し込む深さに気をつける

本体がぐらつかずしっかり安定するように、写真を参照して斜めになった面よりも少し深く下駄が差さるように印をつけます。曲尺をあてて、下駄が直角に差さるように確認しながら、本体の足の裏の切り込みを彫り進めて仕上げましょう。

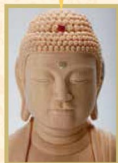
Check!

下駄を差し込む深さに気をつけましょう。

6 白毫と肉髻珠

白毫と肉髻珠を入れる位置を決め、細い彫刻刀で少しずつ穴を彫ります。

途中で白毫と肉髻珠を何度も出し入れして、穴の深さを調節しましょう。

白毫の穴と石に白い絵の具を塗り、白毫を入れます。同様に肉髻珠の穴と石に朱色を塗り、肉髻珠を入れます。筆が扱いにくい場合は、細い棒を使ってもいいでしょう。最後に丸棒などでしっかり押し込んで仕上げます。

※本書では、寸法表記を尺貫法で表示しています。1寸＝約3.03cm　1分＝約3.03mm

全体を組む

蓮台の穴に、光背の下のホゾと本体の下駄をしっかり差し込みます。
※台座の組み方は、P60の図面を参照してください。

仏師の一言

穴は、曲がりの彫刻刀を使ってきれいに仕上げましょう。

仏師の一言

光背は、少し前に傾けると美しく仕上がります。

仏師の一言

最後に彫り残しがないか、光の当て方を変えて全体をよく見て確認しましょう。

仏師の一言

すべてが中心に来るように気をつけましょう。最後に曲尺を中心に置き、左右のバランスを再確認しましょう。

台座の各部と本体の中心線にずれがないか、よく確認しましょう。

完成　阿弥陀如来立像

正面

斜め左

右

左

斜め左

第３章
不動明王を彫る

右手に宝剣、左手に羂索(けんさく)を持った不動明王は、
たおやかな雰囲気の大日如来や阿弥陀如来と
対照的な力強さが特徴です。
彫りの深い表情をイメージしながら彫りましょう。

不動明王坐像
[制作工程]

・図面　P102 ～ 108
・型紙　P109 ～ 111

仏教の守護神の代表的な存在である不動明王は、顔と頭部に特徴があります。全体のバランスを考えて、岩座と光背も力強さを表現できるように彫りましょう。

	材料	線引き
1 本体・手	工程 1	工程 2 図面通りに材料に線引きをしましょう。
2 光背	工程 1	
3 岩座(いわざ)	工程 1	
4 宝剣・宝剣の柄(つか)	工程 1	
5 羂索(環・分銅)	工程 1	
6 框(かまち)	工程 1	

木取り	荒起こし	完成

工程 3

ハンマーやノミを使って型紙通りに木取りをしましょう。

工程 4

両手の位置に気を配りましょう。

工程 5

頭部と胴体のバランスに配慮し、弁髪（べんぱつ）を細かく彫りましょう。

左右非対称なので、両方をよく見てカーブをつけましょう。

工程 2

工程 3

火焔の流れをよく見て丁寧に仕上げましょう。

工程 2

全体を台形に彫り、四隅を斜めに彫りましょう。

工程 3

岩の形を美しく仕上げ、光背を差し込むための穴を開けます。

工程 2

どちらも左右対称になるように彫りましょう。

工程 3

下端の細かい模様を丁寧に仕上げましょう。

工程 2

どちらも左右対称になるように彫りましょう。

工程 3

全体の曲線を美しく整えましょう。

工程 4

左手に羂索を通し、環と分銅をつけましょう。

工程 2

小脚を彫り、框の四隅に貼りましょう。

不動明王坐像（本体・80%縮小）

5
4
3
2
1

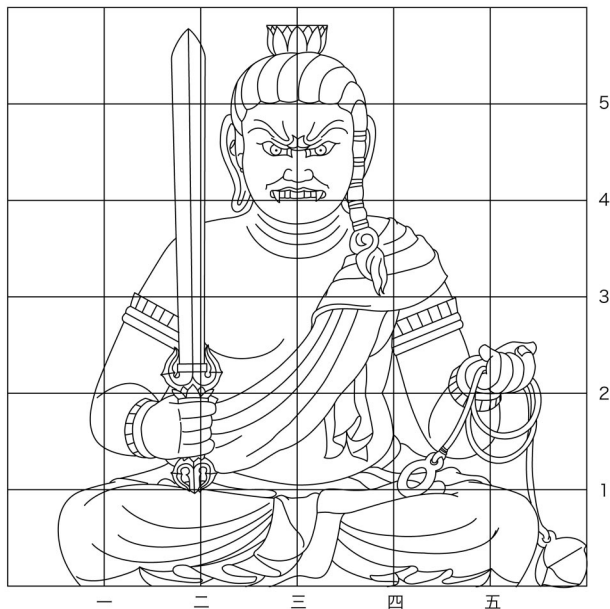
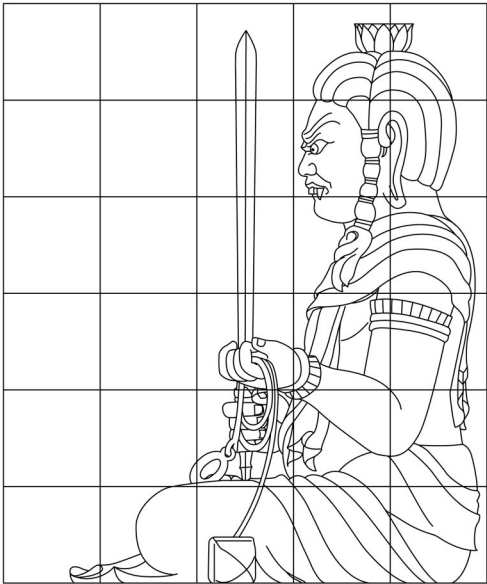
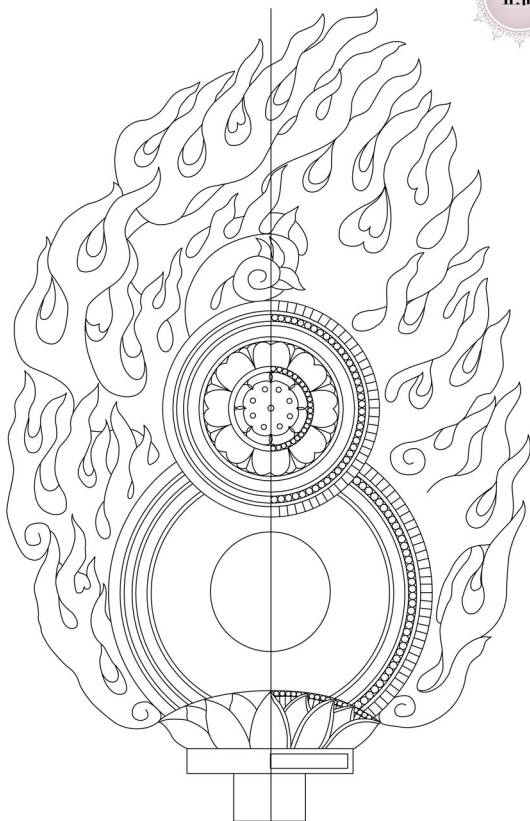
一 二 三 四 五

※天地182mm（升目の天地）になるように、125%拡大コピーして使用してください。

5
4
3
2
1

一　二　三　四

※天地182mm（升目の天地）になるように、125%拡大コピーして使用してください。

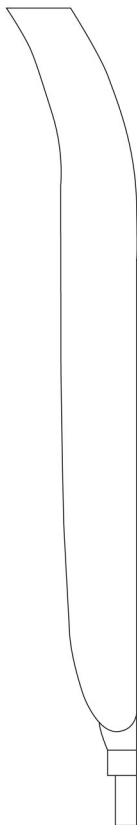
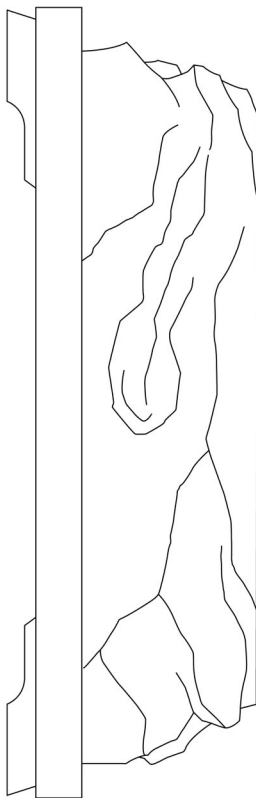
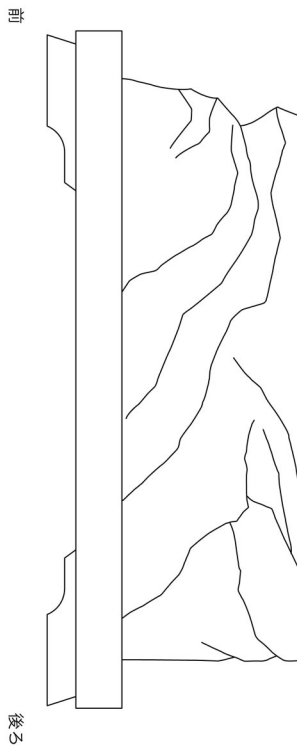
不動明王坐像（光背・60%縮小）

※天地340mmになるように、167%拡大コピーして使用してください。

※天地340mmになるように、167%拡大コピーして使用してください。

不動明王坐像（岩座・80%）

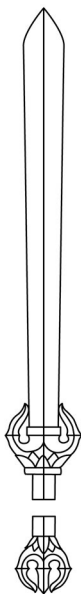
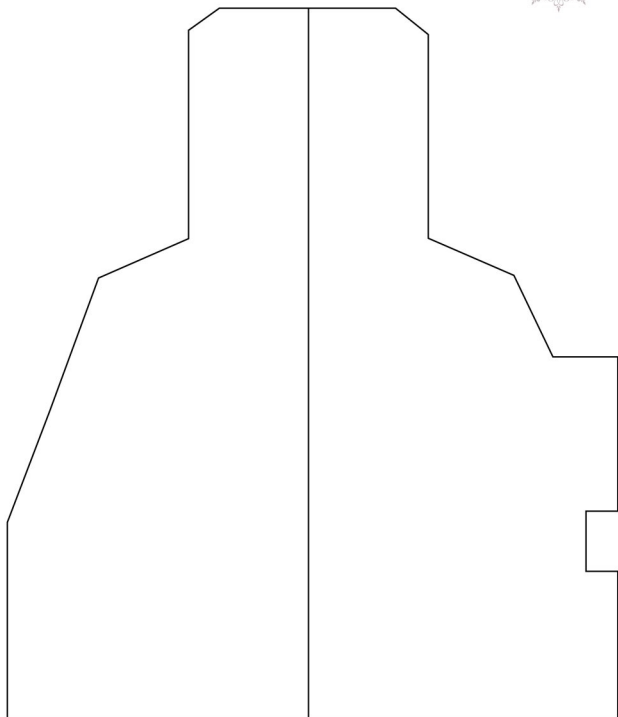
※左右248mmになるように、125%拡大コピーして使用してください。

前

後ろ

※左右212mmになるように、125%拡大コピーして使用してください。

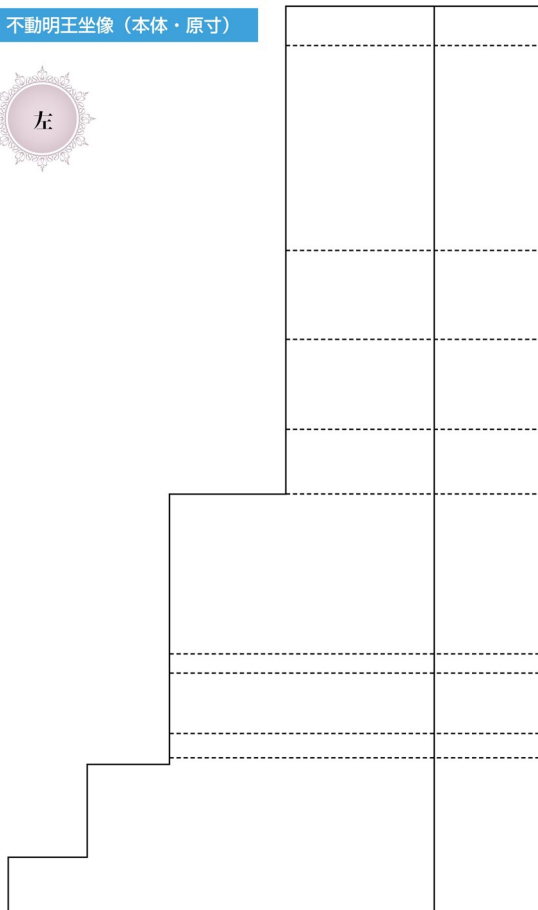
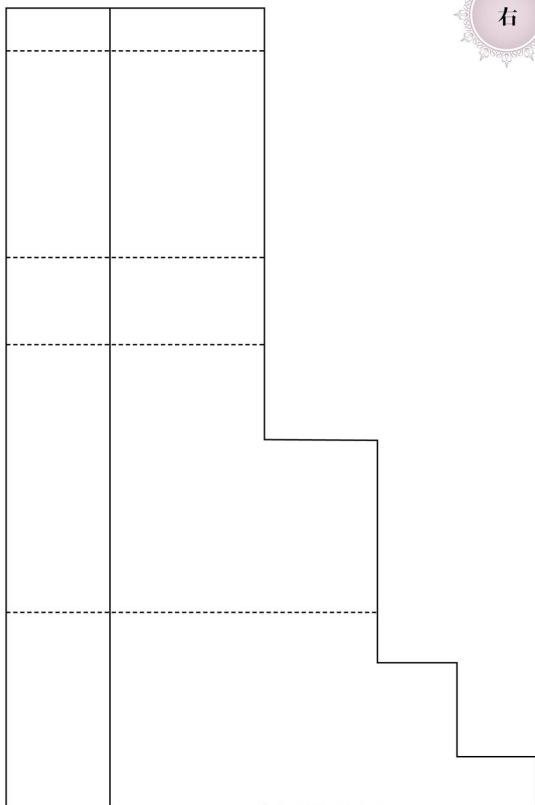
不動明王坐像（宝剣、宝剣の柄、環、分銅・原寸）

正面

横

※そのまま
コピーして
使用してください。

※そのままコピーして使用してください。

不動明王坐像（本体・原寸）

左

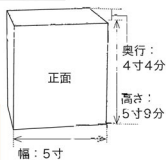
※点線の部分で折り、材料に合わせます。そのままコピーして使用してください。

※点線の部分で折り、材料に合わせます。そのままコピーして使用してください。

① 本体

工程1 材料

木目がきれいな柾目を正面にしましょう。

仏師の一言

底になる部分は平らにしておきましょう。

工程2 線引き

曲尺、トースカンなどを使って、材料に1寸間隔の線を引きます（道具の使い種類はP70を参照）。線引きの後、前後左右の4面に型紙を当てて、図を写し、木取りをします。

仏師の一言

この時点で線引きがずれてしまうと仕上がりに影響が出てしまうので、注意して正確に引くことが大切です。

正面

横

仏師の一言

すべての面に線を引き終わったら、升目の幅を再確認しましょう。

仏師の一言

それぞれの面に図面と同様の位置に数字を記入しましょう。縦と横で数字を色分けして記入するとわかりやすくなります。

上

※本書では、寸法表記を尺貫法で表示しています。1寸＝約3.03cm　1分＝約3.03mm

段差をよく見て正確に木取りする

不動明王は細かい段差が多いので、木取りの際には注意が必要です。全体をよく見て、型紙通りに木取りしましょう。切り落とした部分には新たに１寸間隔の線を引き、数字を書き込みます。

まとめ

◎段差に注意して木取りする
◎場所によって道具を使い分ける
◎細かい部分の角度や幅をよく見る

正面

斜め左

左

左斜め後ろ

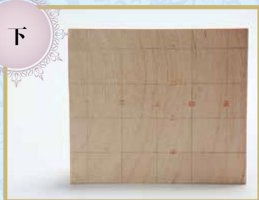
後ろ

右斜め後ろ

右

斜め右

上

下

道具の使い分けに注意する

荒起こしでは主に丸刀とノミを使いますが、細かい場所にノミばかりを使うと欠けたり、彫り過ぎたりしてしまうことがあります。細かい作業にはなるべく丸刀を使って、慎重に少しずつ彫りましょう。

まとめ

◎腕と脇とのすき間に気を配る
◎細かい作業ではなるべく丸刀を使う
◎右手と膝上のすき間に気を配る

仏師の一言

後から腕を切って仕上げるため、臂釧（上腕の腕輪）の下と脇はすき間をあけておきましょう。

仏師の一言

右手の下に宝剣の柄を差すので、膝上とのすき間をあけておきましょう。

仏師の一言

手の動きにも注意しましょう。

全体の荒起こしが終わったら、腕を切り離します。つなぎ目がずれないようにきれいに切りましょう。

仏師の一言

胴付鋸を使うと、よりまっすぐに切ることができます。

コツ17

曲尺を当てて常に寸法を確認しながら彫る

すべての仏像彫刻に共通するポイントは、常に曲尺で寸法を確認しながら彫ることです。全体の仕上がりをイメージしながら、バランスに注意して彫りましょう。不動明王は右手に宝剣を持つので、宝剣と顔の間隔が近くなり過ぎないように気をつけましょう。

まとめ

◎常に全体の寸法を確認しながら彫る
◎宝剣を持つ右手と顔との距離に気を配る
◎いかり肩で力強さを表現する

両手の向きと角度を確認しましょう。

仏師の一言

不動明王はいかり肩に仕上げることで力強さが表現できます。両手の向きと角度も確認しましょう。最後に彫り残しがないか、光の当て方を変えて全体をよく見て確認しましょう。

左手の高さと胴との空間を確認しましょう。

肩から背中のラインと、弁髪（べんぱつ）の流れを確認しましょう。

背中の衣のひだの流れと腰から下の衣の流れを確認しましょう。

肩のラインと、胴体の左右対称を確認しましょう。

右手の表情と腕のラインを確認しましょう。

肩から腕へのカーブと右手と胴との空間を確認しましょう。

仏師の一言

顔の側面の凹凸をよく確認しましょう。

索髪と衣のひだの重なり方を確認しましょう。

Check!

裳先は木口で欠けやすく薄いので、折らないように気をつけましょう。

Check!

底中央を少し削ることで、接地面とのすき間を減らすことができます。

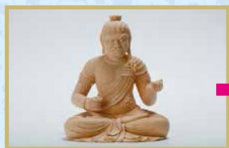
1 手

コツ18

指の丸みと空間が自然に見えるように仕上げる

指の空間はキリなどを使って穴をあけてから、少しずつ広げます。宝剣を持たせ、羂索を通すことを想定して両手の穴の大きさを調節して仕上げましょう。切り離した腕は、断面中央に穴をあけて芯棒を通し、本体に差し込みます。本体の断面にも同様に穴をあけます。

まとめ

◎腕と手首の曲線を自然に仕上げる
◎指を自然に握っているように彫る
◎手のひらにふくらみを持たせて仕上げる

今回の不動明王は結跏趺坐（けっかふざ）という形で足を組んでいます。腕をはずした本体は、足の甲がふっくらと自然に見えるように仕上げておきましょう。

上

裾

左

右

※細かい部分が見やすいように、写真は実際に本体につけた時とは異なる角度で撮影しています。

正面

上

両手の腕釧（わんせん）の幅と厚みが同じになるように気をつけましょう。

Check!

下

左右の手の大きさが同じになるように確認しながら彫り進めましょう。

右手

指の重なり方をよく見て、自然に握っているように彫りましょう。

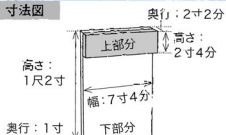
仏師の一言

小指を少しだけ浮かせることで、軽く握っているような表現ができます。

左手

腕のカーブと手首の曲線が自然に見えるように彫りましょう。

② 光背

数枚の板を貼り合わせて使います。木目がきれいな柾目を正面にしましょう。

コツ19

左右非対称であることを念頭において曲線を彫る

不動明王の光背は左右非対称なのが特徴です。左右のさまざまな部分をよく見て、曲面をバランスよく彫りましょう。

まとめ

◎光背の中心線と光背の頂点の関係を理解する
◎火焔の向きと流れをよく見て彫る
◎裏の火焔の彫り方にも気を配る

表

左上
右上

上

仏師の一言

この段階では、先端は少し厚めに残しておきましょう。

仏師の一言

左右は同じ厚みになるように彫りましょう。

Check!

上

下

光背の中心線に対して、光背の頂点がやや右にあることに注意しましょう。

※本書では、寸法表記を尺貫法で表示しています。１寸＝約3.03cm　１分＝約3.03mm

裏

Check!

裏も光背の中心線と光背の頂点との関係を意識しながら、縁に向かって緩やかなカーブを描くようにを彫りましょう。

左上

上

右上

下

工程3

完成

火焔の部分は重なり部分をよく見て、炎の向きと流れをよく見て仕上げましょう。

左上

炎の先端の高さの違いや、中央部の立体感にも気を配りながら仕上げましょう。

表

Check!

隣り合う火焔は異なる動きをしています。炎の先端の向きに気をつけて、勢いのある動きを表現できるように彫りましょう。空間の形にも気を配りましょう。

上

下

光背下のホゾは直角になるように仕上げましょう。

右上

上

仏師の一言

火焔ひとつひとつの高さを変えることで動きに変化を出すことができます。ひとつひとつの動きを意識して形を作りましょう。

Check!

火焔の流れの中で彫る深さを変えることで、より立体感を出すことができます。

上

左右の高低差や曲面の違いをよく見て、光背全体に動きが出るように仕上げましょう。

Check!

透かし彫りは、裏側から見た断面が斜めになるように彫りましょう。

仏師の一言

裏の火焔は、表の火焔の動きに合わせて彫りましょう。

③ 岩座

木目がきれいな柾目を上面にしましょう。

木口が側面になるようにして、正面に印をつけておきます。

全体が台形になるように整え、四隅を斜めに彫ってから図面を写します。

仏師の一言

後ろの岩は浅めに彫りましょう。

P105を参照し、前後に注意して横の面にも図面を写しましょう。

第3章 不動明王を彫る

隣り合う岩が同じ形にならないように変化をつけましょう。後ろ中央には光背を差し込むための穴を開けます。

仏師の一言

穴は、曲がりの彫刻刀を使ってきれいに仕上げましょう。

Check!

深さや幅の違うさまざまな彫刻刀を使い分けて、岩の形を表現しましょう。

左

右

4 宝剣・宝剣の柄

木目のきれいな材料を選びましょう。

・宝剣／高さ4寸8分　幅7分　奥行2分
・宝剣の柄／高さ1寸3分　幅7分　奥行2分

工程2
荒起こし

どちらも左右対称なので、バランスをよく見て彫りましょう。宝剣の柄に穴をあける時は、彫刻刀以外にピンバイスなどを使うといいでしょう。

仏師の一言

宝剣の刃のような細かい細工をする時には、彫刻刀をよく研いで作業をするようにしましょう。

尖った部分を強調すると、きれいな形に仕上がります。宝剣の柄は点線の部分で切り離します。

※本書では、寸法表記を尺貫法で表示しています。1寸＝約3.03cm　1分＝約3.03mm

5 羂索(環・分銅)

・分銅：高さ7分
幅5分　奥行5分
・環：高さ7分
幅5分　奥行1分5厘

それぞれの面に中心線を引き、左右対称になるように彫りましょう。

円を仕上げるのはとても難しいので、時間をかけて丁寧に仕上げましょう。

環は円の曲線をきれいに仕上げましょう。最後に羂索を通すことを想定して、穴の大きさを調節して仕上げましょう。

左手の穴はひもを3本分通すので、大きめにしておきましょう。

環の穴は割れやすい部分です。無理にひもを通さずに、丁寧に扱いましょう。

ひもの両端に環と分銅を通したら、ひもの根本を黒い糸で縛ります。

6 框

木取りした後4枚の板を貼り合わせて枠を作り、内側の4隅に部材を貼ります。

底の四隅に小脚を貼り、金具をつけて仕上げます。

貼る時に小脚が曲がらないようにしましょう。

表

裏

小口は接地面が四角形になるように彫り、框よりも少し内側に貼りましょう。

第3章　不動明王を彫る

※本書では、寸法表記を尺貫法で表示しています。1寸＝約3.03cm　1分＝約3.03mm　1厘＝約0.3mm

全体を組む

岩座の穴に、光背の下のホゾをしっかり差し込みます。

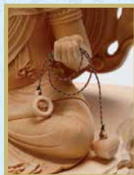
仏師の一言
最後に彫り残しがないか、光の当て方を変えて全体をよく見て確認しましょう。

仏師の一言
火焔光背は、少し前に傾けると美しく見えます。

仏師の一言
最後に曲尺を中心に置き、左右のバランスを再確認しましょう。

仏師の一言
すべてが中心に来るように気をつけましょう。最後に曲尺を中心に置き、左右のバランスを再確認しましょう。

台座の各部と本体の中心線にずれがないか、よく確認しましょう。

仏師の一言
宝剣は多少傾けたり、斜めにして握らせると自然に仕上がります。

仏師の一言
左右の羂索の長さを少し変えるとよいでしょう。

完成　不動明王坐像

正面

斜め左

左
右
斜め右

■監修
仏師　関　侊雲（せき　こううん）

群馬県前橋市出身。父が仏壇工芸師で、子どもの頃から寺社や仏像に親しんで育つ。1994年、20歳の時に仏師で日展作家の斎藤侊琳氏に弟子入りする。2000年、年期を明け、師より「侊雲」の仏師号を賜り独立。2007年、紺野侊慶と侊心会　仏像彫刻・木彫刻教室を開設し代表に就任。2010年、関侊雲　仏像彫刻・木彫刻学院を開校し代表に就任。2013年、日本木彫刻協会を設立し会長に就任。都内、富山、群馬など8か所で教室を開催している。

■監修
仏師　紺野侊慶（こんの　こうけい）

東京都目黒区出身。1996年、15歳の時に仏師で日展作家の斎藤侊琳氏に弟子入りする。2002年、年期を明け、2004年に師より「侊慶」の仏師号を賜り独立する。2007年、関侊雲と侊心会　仏像彫刻・木彫刻教室を開設し副代表に就任。2010年、関侊雲　仏像彫刻・木彫刻学院の副代表に就任。2013年、日本木彫刻協会副会長に就任。

関侊雲仏所ホームページアドレス　http://sekikoun.com/
侊心会　仏像彫刻・木彫刻教室ホームページアドレス　http://sekikoun.com/school/
関侊雲　仏像彫刻・木彫刻学院ホームページアドレス　http://sekikoun.jp/

【STAFF】
■構成　（有）イー・プランニング
■編集　渡辺裕子（提琴舎）
■本文デザイン　小山弘子
■撮影　上林徳寛

人気の三種が彫れる　仏像彫刻　上達のポイント
～大日如来座像・阿弥陀如来像・不動明王像～

2015年12月25日　第1版・第1刷発行

監　修　関　侊雲（せき　こううん）・紺野侊慶（こんの　こうけい）

発行者　メイツ出版株式会社
代表者　前田信二
〒102-0093 東京都千代田区平河町一丁目1-8
TEL.03-5276-3050（編集・営業）
03-5276-3052（注文専用）
FAX.03-5276-3105
印　刷　三松堂株式会社

メイツ出版ホームページアドレス　http://www.mates-publishing.co.jp/
企画担当：大羽孝志